

小学校国語科における書くことの 思考を支える知識及び技能の育成

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 赤澤練

1. 研究の背景

この研究に至った理由としては、大学院の授業（初等国語科の教材研究と授業構想）を受講している際に、小学生の国語科の課題分析をした。令和4年度、令和5年度の全国学力・学習状況調査の問題を解き、解答率と正答率を見た際に、学習指導要領の内容「思考力、判断力、表現力」の中から「B,書くこと」において2年連続で50%を下回っていることがわかった。（図1,図2）

・以下の集計値/グラフは、4月19日に実施した調査の結果を集計した値である。



図1 全国学力・学習状況調査（小学校 国語）令和4年度

・以下の集計値/グラフは、4月19日に実施した調査の結果を集計した値である。

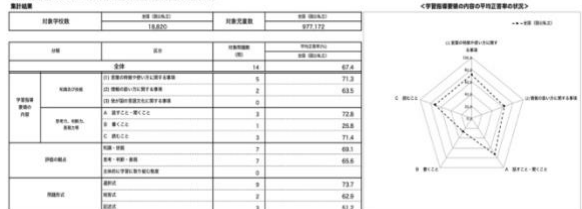


図2 全国学力・学習状況調査（小学校 国語）令和5年度

そこで、まず「書くこと」の解答率と正答率が低いのだろうか、どのような指導が必要なのか、小学生は「書くこと」についてどのような印象を持っているのかを調査したいと考えた。調査し、課題を把握した上で、児童の「書く能力」を向上させたいと思い、本研究を行うに至った。

小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説国語編において、「B,書くこと」の指導事項には、題材の設定、情報の収集、内容の検討、構成の検討、考えの形成、記述、推敲、共有があり、「考えの形成、

記述」に着目した。学習指導要領より、【自分の考えを明確にし、書き表し方を工夫することを示している。書き表し方を工夫するとは、自分の考えを伝えるために、どのような言葉を用いるか「文末表現、敬体か常体か等を含む。」語や文及び段落の続き方やつながりをどのように表現するか、といったことなどに注意して記述の仕方を工夫することである】とされている。「書くこと」の解答率と正答率が低いということは、児童は書くことについて苦手意識があるのではないかと私は考えた。「書くこと」における課題として白坂・香月（2020）では、「書くことがない、書きたくない、どうやって書いたらいいかわからない」書く指導の壁 3N として述べられている。小嶋（2019）では「日常的・継続的な児童との関わり方を通して、計画的・系統的な指導を行う必要がある」と述べられている。また、竹内（2021）では「はじめ、なか、おわり」という、3つの構成で書くことは何となく認識できても、それぞれの段落が1つのまとまりであると認識して文章を書くことは、低学年にとっては難しい。何度も繰り返し学習を積み重ねていくことが必要である。」と述べられている。

2. 研究の目的

本研究では、小学校4学年における書くことの思考を支える知識及び技能の育成に関して研究を行う。学習指導要領「書くこと」の目標は、以下の通りである。

ア、関心のあることなどから書くことを決め、相手や目的に応じて、書く上で必要な事柄を調べること。

イ、文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。

ウ、書こうとすることの中心を明確にし、目的

や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと。
 エ、文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。
 オ、文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすること。
 カ、書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと

しかし、全国学力・学習状況調査の「書くこと」が低いということは、思考力もそうだが、知識及び技能が足りないのではないかと考えた。これらのことから、知識及び技能の習得は、思考力を高めることにつながる。思考を支えるための知識及び技能を育成することを目的とした。

3. 研究方法

- (1) 対象校…山梨県内の公立小学校
- (2) 期間…2024年5月～12月
- (3) 児童…第4学年（男児8名、女児12名）
- (4) 実施方法
 - ・アンケート調査
 - ・現状把握調査
 - ・授業実践

4. 具体的な研究内容

(1) アンケート調査1回目

全国学力・学習状況調査や先行研究での課題は挙げられているが、実習校での状況、第4学年に配属になり、児童の現状を調査するために行った。（表1）

①あなたは文章等を書くことについてどう思っていますか？
②段落や句読点（、。）を付けることはできますか？
③現在、みなさんはタブレット端末を持っていますが、鉛筆で書く時と比べて、タブレットで入力の方が、文章を書きやすいですか？

表1 アンケート調査内容

①の質問を集計したものが、表2である。【どちらかという苦手】が1番多かった。選択した児童は、「全く書けないわけではないが、自信がな

い」「書くのに時間がかかってしまう」「迷ってしまう」という理由が挙げた。【得意】【どちらかという得意】を選択した児童は、「文章を書くのが好き」「書きたいことが思い浮かぶ」「すぐに書けるわけではないが、苦手ではない」という理由が挙げた。【苦手】と選択した児童は、「何を書けばいいかわからなくなってしまう」「書き出しが思い浮かばないから時間がかかる」という理由が挙げた。

選択肢	人数
得意	6人
どちらかという得意	4人
どちらかという苦手	8人
苦手	2人

表2 ①あなたは文章等を書くことについてどう思っていますか？

②を集計したものが、表3である。【できない】と選択した児童はいなかった。【できる】と選択した児童は、「3年生でたくさん勉強したから、記憶に残っている」「はじめ・なか・おわりを覚えている」「本や教科書を読む時に、段落や句読点をよく見ているから」という理由が挙げた。【自信はないができる】と選択した児童は、「忘れてしまうことがある」「付けることができないわけではないが、自信がない」「文章を書いて提出した時によく直されている」という理由が挙げた。段落や句読点を付けるということは、知識としてもっていることがわかった。

選択肢	人数
できる	7人
自信はないができる	13人
できない	0人

表3 ②段落や句読点を付けることはできますか？

③の質問を集計したものが、表4である。【書きやすい】が1番多かった。選択した児童は、「3年生でたくさん練習したから」「授業でタブレットに記入することが多く、慣れたから」「すぐに消したり書いたりすることができるから」という理

由が挙げた。【あまり変わらない】と選択した児童は、「書くことについては、どちらも変わらない」「打ち込むか書くかの違いだから」という理由が挙げた。【書きにくい】と選択した児童は、「タイピングが苦手」「打つのに時間がかかってしまうから」「文章を考えるのが苦手で、打つとなるともっと時間がかかってしまうから」という理由が挙げた。

選択肢	人数
書きやすい	12 人
あまり変わらない	5 人
書きにくい	3 人

表4 ③現在、みなさんはタブレット端末を持っていますが、鉛筆で書く時と比べて、タブレットで入力の方が、文章を書きやすいですか？

アンケートを通して児童が「書くこと」に対してどのように感じているのかがわかった。また、授業において、ICT 器具（タブレット端末）を多く使用していることもわかった。

(2) 現状把握調査 1 回目

しかし、これだけでは「書くこと」に対する児童の能力はわからないため、現状把握調査として、原稿用紙を使用し、教師側からお題を示して記入してもらうことにした。お題及び条件、評価基準は表5の通りである。

お題	条件	評価基準
①学校の良い所を教えてください。	字数制限なし	段落 句読点
②春夏秋冬、あなたの好きな季節はどれですか	100 字以内で記入すること 必ず理由も記入すること	句読点 接続語 (繋ぎ言葉) 理由はなぜならば

表5 現状把握調査内容

①の分析をしてみると、段落意識について、最初の書出しは1マス空けていることがわかる。しかし、その後の文を書く際は、そのまま書いていることが多いため、段落意識が決して高いとは言えない。(図3,4)

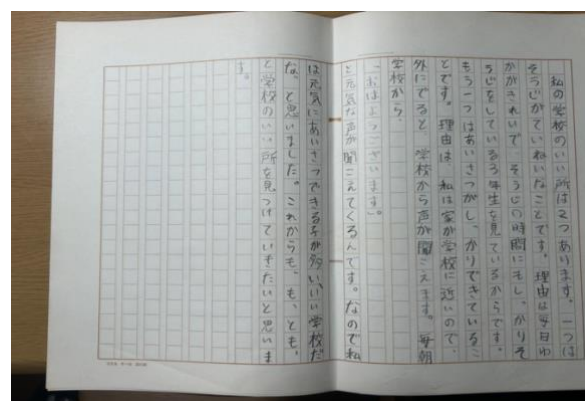


図3 段落意識が課題とされる児童の文章

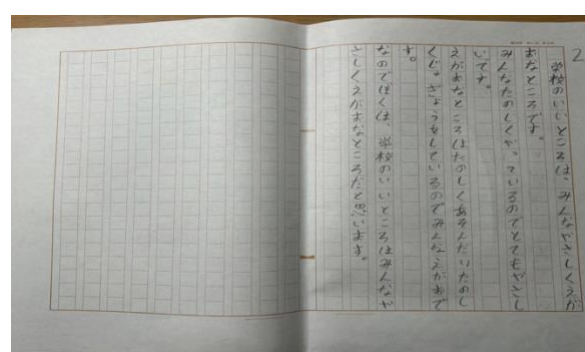


図4 段落意識と句読点が課題とされる児童の文章

②の分析をしてみると、理由を書く際に「理由は」「なぜならば」と接続語（繋ぎ言葉）を入れていることがわかる。これは、言葉は違うが全員が記入していた。(図5)

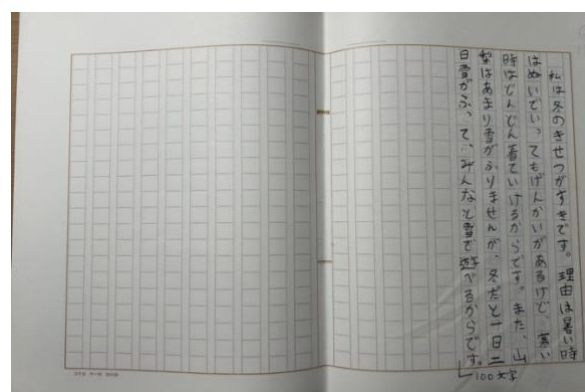


図5 「理由は」と書けている児童の文章

①,②を分析して、本学級の児童の改善点は何かをクラス担任と指導教授と話をした。結果、やはり「知識及び技能」の育成が必要だということが明らかになった。(表6)

課題内容	理由
①段落意識	段落を付けるということを知っていても、実際に書いている時、どのタイミングで段落を付ける（改行する）のかが理解していないのではないかと考える。
②句読点	主に読点が適切に付けられていない児童が多いと判断した。文章（内容）にもよるが、基本的には「接続語の後」に付けるようにする。

表6 第4学年「書くこと（知識及び技能）」の課題

(3) 授業実践

課題が明確になったことから、週2回朝学習の時間と国語授業最初の5分をいただいた。教材として、茅野・曾根（2022）の『カクトレ中学年』を活用しながら繰り返し問題に取り組んだ。問題を理解して段落や句読点が適切に付けることができるようになるために、問題を解いた後に原稿用紙で文章を書くようにした。（図6,7）実際に取り組むと問題を解く時間が2分、原稿用紙に記入する時間が3分で、全て合わせて5分という短時間で集中して行うことができるため、児童も飽きずに取り組むことができた。また、全てカクトレの問題を活用するのではなく、独自で作成したヒントやアドバイスを無くした問題に取り組んでもらうことで、自分自身で記入できるようにした。また、国語の授業で文章を適切に直すことをしていたため同じように書き直す問題も作成した。（図8）

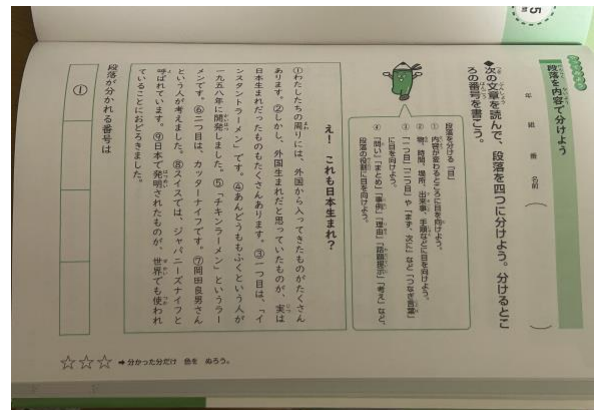


図6 『カクトレ』問題（段落）

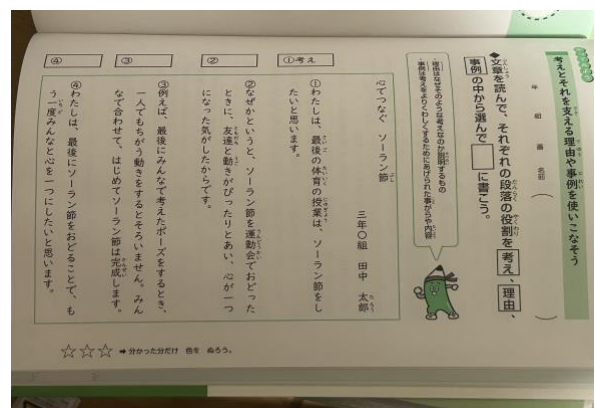


図7 『カクトレ』問題（段落の役割）

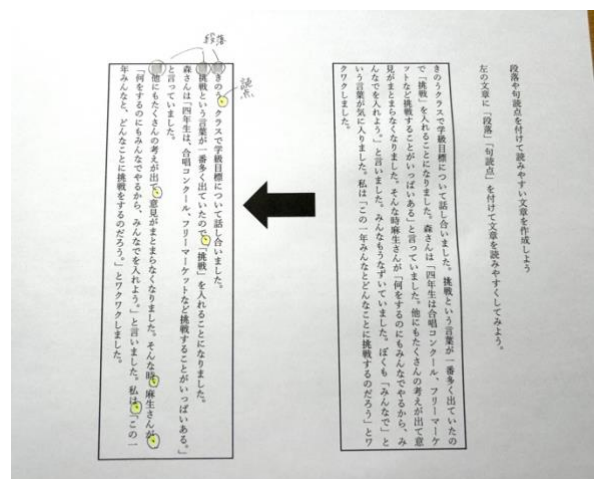


図8 独自で作成した問題（一部）

(4) 現状把握調査2回目

1ヶ月後、現状把握調査を実施した。（表7）今回、運動会後ということでお題は運動会になっている。今回の調査では、他学年（中学年から高学年）の4つの学年の協力を得ることができた。

お題	評価基準
私の1日(運動会)を見ていない人に教えよう！」	(I) 段落を付けているかどうか(適切かどうか) (II) 読点が適切に付けることができるか

表7 現状把握調査2回目

今回の調査では、各学年1時間授業の時間をいただき、取り組んだ。原稿用紙1枚の文字数を通常より少なめの240字にすることで、3年生も記入しやすいように工夫した。また、書き始める前に運動会後のために、運動会ではどんなことをしたのかを児童に質問し、紙を児童に1枚ずつ配布し、マインドマップを作成してもらった。記入する際に児童がイメージをしやすいように、「何をしたのか」と問うだけでなく、運動会での出来事を少し伝えながら児童から何をしたのかを発言してもらった。(図9) 各学年によってマインドマップの内容は異なり、文章(内容)にも違いが生まれていた。

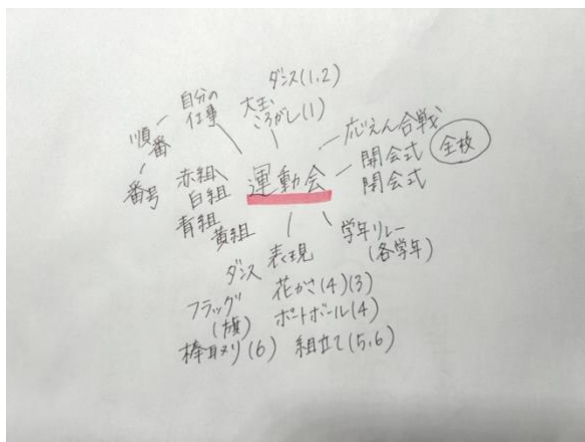


図9 運動会マインドマップ

(I) 段落を使えているか(意識)の分析をした結果(表8)特に3年生、4年生が意識していることがわかった。4年生は問題に取り組んだ成果が出ていると感じた。4年生は普段から取り組んでいるため、他学年と比較すると高いと思うが、3年生にきた際に【普段の授業から文章を書くときは、「はじめ・なか・おわり」を意識している】ということだった。また、使えている児童の中で段落が適切かどうかを調査(表9)した際

に、4年生が1番適切に使えている。しかし、全員ではなく、1割は適切ではなかったため、全員が適切に付けられるように工夫しながら指導をしていきたいと考えた。

評価基準	人数
(3年) 付けている	15人
付けていない	9人
(4年) 付けている	15人
付けていない	3人
(5年) 付けている	8人
付けていない	8人
(6年) 付けている	6人
付けていない	13人

表8 (I) 段落を付けているかどうか

評価基準	人数
(3年) 適切	7人
適切ではない	8人
(4年) 適切	11人
適切ではない	4人
(5年) 適切	6人
適切ではない	2人
(6年) 適切	4人
適切ではない	2人

表9 段落が適切かどうか

(II) 読点を適切に付けることができているかを分析した結果、(表10) 普段から取り組んでいる4年生も適切に付けることができている児童が複数いることが結果からわかった。適切ではないというのは、接続語(繋ぎ言葉)の後に付けていない、そもそも読点を付けていないことである。児童は、ワークシート等で読点を付けるということを知識として得ることはできたと思う。しかし、どこで付ければいいのか、児童の中で知識としてまだ定着していないということがわかる。学期末までに身に付けられるように、ワークシートは句読点を少し多めにしていきたいと考えた。

評価基準	人数
(3年) 適切	8人
適切ではない	16人
(4年) 適切	11人

適切ではない	7人
(5年) 適切	5人
適切ではない	11人
(6年) 適切	12人
適切ではない	7人

表10 (II) 読点が適切かどうか

(5) アンケート調査2回目

ここまでワークシートや独自プリントに取り組みながら、数多くの問題に触れ、解いてきた。最初と比較してどのくらい児童の知識及び技能は変化しているのかを調査・分析するためである。また同様に理由も聞くことで変化を明確にしていく。調査内容は、表1と同様であるが、今回3つ目の項目は問わず、2つの項目を回答してもらうことにした。理由としては、タブレット端末と比較することは、今回の調査対象ではないためである。分析結果として変化した人数も表に提示する。

1つ目の「文章を書くことについてどう思っているか」の質問に対して変化が見られたのは、【どちらかという苦手】という項目から【どちらかという得意】に3名の児童が変わったということである。(表11) 児童からは、「ワークシートの問題や文章で書くことが多かったため、すぐにはないが、やり方(使い方)を覚えることができた」「今まで文章を書くとなるとどうして良いかわからなくなることが多かったが、繰り返し同じ問題をやることでそうすればいいかわかるようになってきた。」という理由が挙げられた。【苦手】から【どちらかという苦手】に1名児童が移った。苦手と思っていた児童の変化はとても成果があると考えられる。【どちらかという得意】から【得意】に1名移った。取り組みをすることで、文章を書く際に自信を持つことができたからこそ増えているよかったと捉える。しかし、苦手と感じている児童は、合わせて5名いるため、1人でも減らせるように残りの期間取り組んでいきたい。

選択肢	1回目	2回目	変化
得意	6人	7人	+1
どちらかという得意	4人	8人	+4
どちらかという苦手	8人	4人	-4
苦手	2人	1人	-1

表11 あなたは文章を書くことについてどう思っていますか？

2つ目の「段落や句読点(、。)を付けることができますか」という質問項目に対して変化が見られた。【自信はないができる】と選択した児童が7名が【できる】に変わった。(表12) 自信を持つことができたということになるが、児童からは、「読みやすさを考えると、自分が息継ぎの時に付ければいいということが理解でき、書くときにも付けることができた。」「読点をつける位置を練習(ワークシート)でやったのでできるようになった。」という理由が挙げられた。

選択肢	1回目	2回目	変化
できる	7人	14人	+7人
自信はないができる	13人	6人	-7人
できない	0人	0人	—

表12 段落や句読点を付けることができますか

ここまですり返ると、カクトレと独自のプリントを活用しながら、児童が課題とする項目を重点的に繰り返し取り組んできた成果が出てきていると言える。現状把握調査2回目の「運動会」をテーマにした文章を原稿用紙に記入させた時と今回を比べると、書いている際も鉛筆が止まっている児童は少なかった。

しかし、今回の調査の中で1つ新たな課題が見つかった。それは「接続語(繋ぎ言葉)」である。実際に原稿用紙に児童が書いたものを見ると「理由は」と書いている分には良いが、「でも」「しかし」を文章の内容と合っていない時に使

用し、改行の最初の言葉に「次に」を連続して使用している児童も見られた。文中の接続語と改行の最初の言葉について、少し伝える時間をもらい、言葉を指導し、接続語の使い方として、この文章の場合は「だから」「しかし」を使うということを指導した。

(6) 現状把握調査3回目

2学期末となり、研究もまとめに近づく中、課題である「段落」「句読点」、新たに「接続語（繋ぎ言葉）」に関するワークシートに取り組み、最後に原稿用紙を使用して、調査した。（表13）評価規準は、「段落」「句読点」「接続語（繋ぎ言葉）」の3つである。

お題	内容
2学期の振り返りと3学期の抱負を書こう	(1) どんな行事があったのか (2) あなたは何をしたのか →どうだったのか (3) 3学期の抱負 (頑張りたいこと)

表13 現状把握調査3回目

はじめに、全体的に読んでみて、今まで段落は付けることができていても、変な時に改行していたりしていたが、今回は段落を1つのまとまりとして捉えることができていたということがわかった。（図10）段落について、9割の児童が適切に付けることができていた。どんな行事があったのか、何をしたのか、どうだったのか、3学期の抱負と「はじめ、なか、おわり」の3つの段落は全員が付けることができていた。また、「〇〇は3つあります」といったような書き出しから始めることができているため、文章を書く上で構成を練ることができていると判断できる。

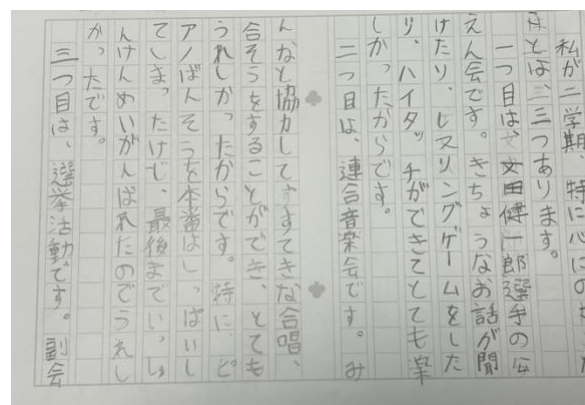


図10 段落を1まとまりとしている児童の例

句読点については、以前は読点がほとんどなかった児童も適切に付けることができていた。（図11）普段大人は国語的な表現で会話をし、話を理解することはできるが、今回の対象は小学生ということから、中高生とは違い、丁寧かつ簡潔で伝えなければならない。したがって今回、句読点（主に読点）の指導をした際に「自分が読んでいる時に息継ぎをするタイミングで読点を付ける」「接続語（繋ぎ言葉）の後に付ける」と伝えたが、息継ぎの方が児童は理解しやすかったと言っていた。

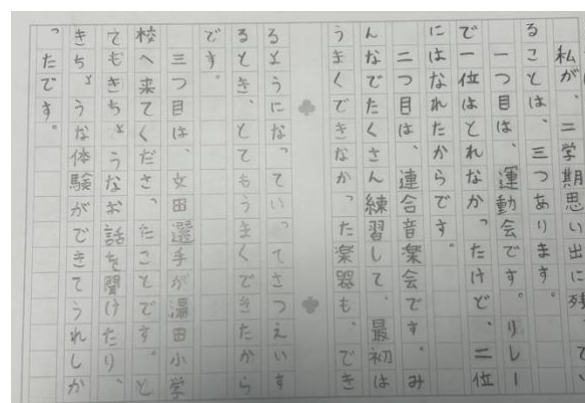


図11 句読点を適切に付けることができている児童の例

接続語（つなぎ言葉）については、「理由は」「なぜならば」「しかし」「けれど」「次に」「それから」が多く用いられていた言葉である。（図12）接続語を使用することで、箇条書きにならず文章として読むことができる。中には「次に、次に」と連続して使っている児童もいたが、ほとんどの児童が意識して使っていることがわかった。

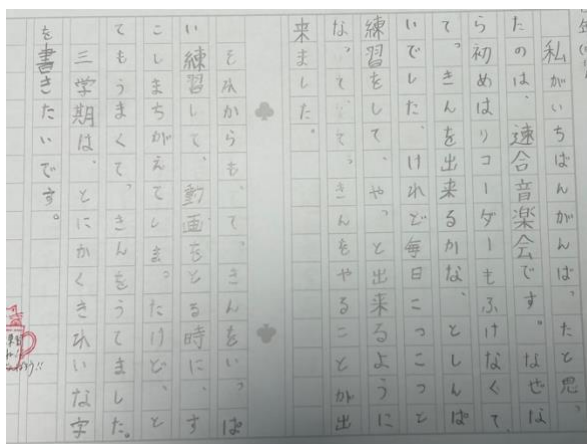


図 12 接続語を意識して使っている

5. 研究の成果

本研究では、アンケート調査（2回）、授業実践として、現状把握調査（3回）取り組んだ。その成果として、「書くこと」については、思考力を下支えする「知識及び技能」を身につけなければならないということがわかった。児童1人1人学力が違いため、課題も異なる。いきなり長い文章を書かせてしまった場合、最初のアンケートに児童が答えた通り「自信がない」「書くことを迷ってしまう」「どうやって書くのかわからない」という状況に陥ってしまう。そのため、はじめは短文から取り組んでいくことが大切である。

児童は書くことにおいて、「何が理解できていないのか」「何が苦手なのか」を教師は明確にしておく必要である。課題を知った上で短時間でも計画的に、継続して問題を解かせることで、知識及び技能が身に付くということがわかった。また、適切に「段落」や「句読点」を付けることができるようになった場合、児童は「できた」「わかった」と自信を持って今後文章を書くことができるのではないかと考える。最後の調査では、「段落」「句読点」「接続語（繋ぎ言葉）」の3つを適切に活用することができていた。学年が上がるとともに、文章を書くことが多くなるため、今回取り組んだことを、今後に生かしてもらいたい。

6. 本研究の課題

課題としては、一般的にこの実践が教育現場に

おいて活用することができるのかどうかということである。「書くこと」における指導は学習指導要領にも載っている通り、多くの項目がある。今回は「考えの形成、記述」特に「記述」に着目して研究に取り組んできたが、指導項目には他にも項目があるため、今回の授業実践では準備期間も十分にあり、実習校にも配慮をしていただいた。そのため、教材活用、ワークシートの作成、朝学習の時間、授業実践を行うことができた。このことを考えると、時間の面で厳しい部分があると考ええる。

7. 今後の展望

今後としては、今回の研究において記述における知識及び技能の育成に取り組んだが、これが既存知識として定着した上で、文章を書くための「思考力」を育成していきたい。また、課題でも述べたように限られた時間の中でどのような指導が必要なのか、思考力の育成のために準備ができるのか、効果的な教材開発の方法などはあるのかを考えていきたい。

8. 参考・引用文献

国立教育政策研究所『全国学力・学習状況調査報告書「小学校 国語」』令和4年度

国立教育政策研究所『全国学力・学習状況調査報告書「小学校 国語」』令和5年度

文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋出版

白坂洋一・香月正登（2020）『子どもの論理で作る国語の授業-書くこと-』p.10-15 明治図書

小嶋久美子（2019）『小学校国語科「書くこと」の意欲についての研究-「個人外要因」としての「環境」に着目して』

竹内恵美子（2021）『小学校国語科における書く力を育てる指導研究-低学年において論理的な文章を書く力をつけるための指導の工夫-』

茅野政徳・曾根明之（2022）『「まったく書けない」子の苦手を克服！ 教室で使えるカクトレ中学年』 東洋館出版